

徳川みらい学会第6回講演会



「駿府における徳川家康の御大工・中井大和守」

大阪くらしの今昔館館長 谷直樹氏



徳川みらい学会第6回講演会を2月24日(金)、しずぎんホール「ユーフォニア」で開催。大阪くらしの今昔館館長で、静岡市歴史文化施設の建設検討委員を兼ねる谷直樹氏が「駿府における徳川家康の御大工・中井大和守」をテーマに講演しました。講演の要旨は次の通り。
(文責企画広報室)

江戸初期を代表する建物を造る

駿府城の天守台の発掘状況を拝見してきました。京都の二条城に比べると大きな天守台の石垣で、大坂城の天守台に匹敵すると思います。

中井家の出身地は法隆寺の門前の西里という大工村です。正清の祖父は侍で、戦争で討死。正清の父・正吉とその弟・正利は縁故をたどって法隆寺の大工・中井伊太夫の許に身を寄せて大工になり、中井大和守正清が生まれました。法隆寺の現在の建物は、正清が修理したものです。

慶長10年代に、正清は沢山の仕事をします。城の天守を造った年代を見る

と、二条城天守が慶長11年。江戸城天守と駿府城天守が慶長12年。駿府城天守は数カ月後に焼けてしまい、慶長13年に再建します。名古屋城天守が慶長17年。

この時期、京都の内裏、豊臣秀頼からは方広寺大仏殿の再建を依頼されるなど、江戸時代初期のシンボリックな建物を同時並行的に造っていきました。慶長17年には従四位下に上りました。大工棟梁としては、異例の出世をした人です。

短期間に大量の建物を造る

駿府城は、慶長11年3月に家康が駿府を視察して、慶長12年2月から築城が始まり、1年足らずでほぼ完成します。この天守は慶長12年12月22日に全焼します。

天守が焼けたことを聞いた正清は、京から大工集団を引き連れて駿府に馳せ参じ、慶長13年1月14日に上棟式、3月3日には「駿府城殿閣屋舎ことごとく瓦葺になし、御座所はことさら白鐵(すず)を沃せしめらる」。要するに、防

火構造的な建物を造りました。3月11日には大御所が御座所にうつっています。中井家の配下の大工は、短期間に大量の建物を造ることに精通していました。

中井家文書で見る駿府城

中井家文書8千点を大阪くらしの今昔館で預かっています。そのうち5195点は重要文化財に指定されています。駿府城関係史料としては、本多正純や大久保長安が家康の命を受けて正清へ送った書状は残っていますが、駿府城の平面図、断面図、立面図は残っていません。由緒書には、駿府城の建物の奉行について書かれています。天守、二ノ丸書院、御数寄屋(茶室)は小堀遠州。本丸の小天守、対面所、書院など御殿関係は彦坂。実際の工事は、奉行の配下の棟梁、その下の平大工が進めました。この文書から、本丸、二ノ丸の建物の構成は分かれますが、どこにどんな間取りで建てられたかは、分かりません。

中井家の系譜を見ると、正清は駿府に屋敷を拝領して、長く滞在しています。各地の工事の総監督に行かなければならないので、駿府から京、大坂、名古屋、江戸、日光へと移動しています。駿府の屋敷に置いてあった史料は、すべて火事で燃えてしまったと書いてあります。

慶長19年に駿府城の繕い普請をした史料を見ると、城を造る時は、法隆寺の西里や京の大工が300〜500人の規模で入りますが、造った後のメンテナンスには地元の大工を入れていきます。

大坂の陣における大工の役割

また、慶長14年には、駿府の浅間神社、京の知恩院、江戸の増上寺の工事を同時に進めていたことが史料からわかります。正清が大坂冬の陣の11月、本多正信に宛てた書状には、御陣小屋、鉄の盾を造る仕事を仰せつけられたと書いてあります。鍛冶屋、材木屋、大工が、徳川方が大坂城を攻める時に使う盾500帖を、豊臣方の方広寺の作事現場で、大仏殿を造った材木のあまりで造っています。

茶臼山の家康の本陣の御殿風の建物は、正清と配下の大工が4日間で作っています。大工にとつては、戦争も大きな仕事でした。

大坂夏の陣から1年経たないうちに、家康は駿府で薨去。久能山東照宮は、桃山建築の集大成です。その半年後の日光東照宮は、世良田東照宮に残されています。正清は家康薨去の3年後、元和5年1月21日、近江の水口で病死しました。55歳。

個人・法人会員を随時募集しています。皆さまのご入会をお待ちしております。
〈お問い合わせ〉徳川みらい学会事務局 〈TEL〉284-9660 〈HP〉[徳川みらい学会](#) [検索](#)